様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科研費 KAKENHI

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　６ 年　６ 月　３ 日現在

機関番号： ３２５１４

研究種目： 基盤研究(C)（一般）

研究期間： 2020～2023

課題番号： ２０Ｋ０２７７３

研究課題名（和文）ケアラーの課題に照らした哲学対話的家庭科授業プログラムと社会教育への展開

研究課題名（英文）The Home Economics Program of Philosophical Dialogue for Carers' Challenges and Social Education

研究代表者

齋藤　美重子（SAITO, Mieko）

川村学園女子大学・生活創造学部・教授

研究者番号：６０７４８９８７

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　2,400,000円

研究成果の概要（和文）：　文献研究によりケアを再定義すると、ケアとは、人間と人間、人間と環境との相互作用の中で生きることそのものであり、ユニバーサル・ケアと再定義された。また、全国成人アンケート調査結果より、ケアしているか、ケアされているかという認識の下で、「共生型」「孤独孤立型」「ケアド単独型」「ケアラー単独型」の4類型化ができ、ケアしケアされているという認識の「共生型」は他の類型に比べて、自己の能力を最大限に発揮すると同時に多様な支援を求めていたことが確認された。
　ケアに関する家庭科授業及び生涯学習では、ケアしケアされている当事者性を持ち、ケアの多義性を理解して生きていくことを考える哲学対話プログラムを開発した。

研究成果の学術的意義や社会的意義
　ケアを人間が生きる生活そのもので、普遍的なケアと再定義したことは学術的意義がある。また先進国だけでなく東南アジア研究者との交流を通して、ヤングケアラーが世界の今後の課題であることを共有した。ケアの課題に照らした家庭科教育及び生涯学習プログラムの開発では、学校機関、公的支援機関、医療機関、地域、職業訓練機関等との連携と、フラットな対話の必要性を明らかにしたことは学術的意義がある。
　地域では、みんなの居場所：CARE PLACEを定期的に開催し、当事者の声を聴く居場所を提供し、ケアがあらゆる人の問題であるという啓発活動を行ったことは孤独孤立社会からの脱却に向けて社会的な意義がある。

研究成果の概要（英文）：After redefining care through literature research, it was redefined as universal care, which means living in the interaction between humans and between humans and the environment.
Based on the results of a national survey of adults, it was possible to categorize people into four categories based on their perception of whether they provide care or are cared for: "coexistence type", "solitary isolation type", "cared alone type", and "carer alone type".It was confirmed that the "coexistence type" who perceived that they were being cared for were more likely than other types to demonstrate their full potential and at the same time seek a variety of support.
In home economics classes and lifelong learning related to care, we have developed a philosophical dialogue program in which students take ownership of caring and being cared for, and consider how to live their lives while understanding the ambiguity of care.

研究分野： 家庭科教育，生活経営学，生涯学習

キーワード： ケア　家庭科教育　生涯学習　哲学対話　相互作用　授業デザイン　セルフアドボカシー　ケアラー

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

研究成果報告書

ケアラーの課題に照らした哲学対話的家庭科授業プログラムと社会教育への展開

The Home Economics Program of Philosophical Dialogue for Carers' Challenges and Social Education

研究代表者：齋藤美重子（Mieko SAITO）川村学園女子大学生活創造学部・教授

1. 研究開始当初の背景

(1)世界におけるケアラーの現状と日本

イギリスでは 1995 年ケアラー法，1999 年には National Carer Strategy が策定され全国サービスが展開され，フランスでもケアとケアラーの QOL を高める支援とケアラー教育の今後の戦略も公表された（三富 2008，2016）。しかし，日本においてはいまだにケアラー認知度が低く，ヤングケアラーについて澁谷 (2018) が学業や日常生活への影響を明らかにしているが，学校教育の中で取り上げられている授業実践は管見の限りみあたらなかった。

(2)哲学対話と本研究の学術的独自性

Lipman（2003）は具体的な生活の中にテーマを設定した哲学対話により子どもにも思考力を育成できることを示した。家政学の研究対象「人と環境との相互作用」という動態的認識と，研究目的「よりよい生活を実現するために生活問題を予防し解決しようとする個人・家族・コミュニティをエンパワーすること」（日本家政学会家政学原論部会，2013）を踏まえ，ケアラー研究を家政学・哲学・福祉に接合させ，思考力・倫理を探究する哲学対話的家庭科教育を追究する本研究は，家政学および哲学におけるケアの位置づけを明らかにし，既成学問の枠を超えた新しい授業プログラムの創造につながる。またそのプログラムを社会教育に生かすことは社会的意義があると考えられた。

(3)従来の研究経過及び準備状況

齋藤（2018）は，世界の主要家政学会誌 9 誌の内容を比較し，SDGs で「誰も置き去りにしない社会」の構築が家庭科教育と親和性があることを解明した。また，齋藤(2016，2019)により，教育手法として対話型学習の重要性も指摘した。佐藤(2016)は家政学における生活や家族の概念を論じ，叶内 (2019) は幼児とのふれあい体験を通した家庭科保育学習について研究している。また，齋藤と佐藤，叶内は同大学の同僚として連絡を密にとり，すでに学科主催・我孫子市後援でケアラーを対象とした集会（ケアラーズサロン，現名称みんなの居場所：Care Place）を開催し，研究準備は整っていた。

2. 研究の目的

(1)ケアを再定義し，ケアラー（ケアしている人）・ケアド（ケアされている人）の実態を明らかにすることである。

(2)ケアラー研究を家政学・哲学・政治学・人類学に接合させ，ケアラーの課題に照らした，思考力・倫理を探求する哲学対話的な家庭科授業プログラムおよび生涯学習プログラム

を開発することである。

3. 研究の方法

(1)家政学，哲学，政治学，経済学，教育学，福祉学，人類学など学際的に文献研究を行い，ケアを再定義するとともに，ケアラー研究を学問に接合させる。
(2)量的調査として，全国成人アンケート調査を実施し，ケアの実態を把握し，ケアラーの課題を探る。
(3)質的調査としては，ケアラーでありケアドへのヒアリング調査を行い，ケアラーの課題及びケアラーの QOL 向上に必要な要素を探る。
(4)上記(1)(2)(3)を踏まえて，既成学問の枠組みを超えたケアラーの課題に照らした哲学対話的教育プログラムを開発・実践して検討する。

4. 研究成果

(1)ケア概念の再定義とケア学習の視点

文献研究により家政学と倫理，福祉，人類学，フェミニズム政治学との融合を図り，ケアを再定義できた（齋藤・佐藤，2021）。ケアとは社会的規範や自然環境・社会状況等の影響を受けながらヴァルネラブルな人間同士が身体的かつ情緒的に配慮する共鳴・共振・共感的な相互行為・相互関係・相互作用と再定義される（齋藤，2024ab）。つまり，ケアとは生活そのものの営みであり，ユニバーサル・ケアといえる。ただし，ケアには自己成長を促すとともに葛藤や不安，重荷，差別，偏見など多義性がある。

学校教育における今後のケア教育では，様々な教育的ニーズのある子どもに対して個に応じつつ，多様な社会的背景をもつすべての人がヴァルネラブルな当事者であるという前提のもと，①ケアしケアされることが人間の営みであるという視点，②ライツベースアプローチの視点，③生きることを考える視点，④自分自身の多様性を認識し多様性を語り合いせめぎ合い認め合う視点，⑤ケアの多義性を考える視点，⑥ケアの倫理，徳の倫理，未来倫理，正義の倫理を編んでセーフティネットにする視点が示唆された（齋藤，2022a）。

(2)全国成人 3000 人を対象にしたアンケート調査結果

全国 20 歳以上の成人男女（20 代・30 代・40 代・50 代・60 代・70 代以上男女各 250 人，平均年齢 49.75 歳，標準偏差 16.56）計 3000 人を対象に，Web を利用したアンケート調査を実施した(2021 年)（詳細は齋藤・佐藤 2023）。その結果，図 1 のように 4 類型化された。

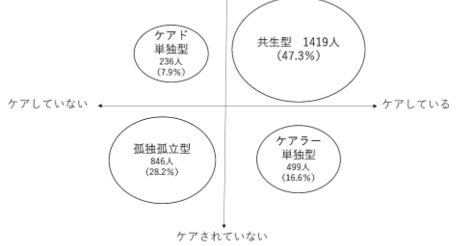


図 1　ケアラー・ケアド認識 4 類型図（n=3000）(%)（図 1・図 2・図 3 ともに齋藤・佐藤 2023）

ケア実践については，各項目におけるケア 4 類型群別の平均得点の比較を Tukey の HSD 法により検

討した（図 2)。「共生型」はケア実践に対して，自己の能力を最大限に活用しつつ，互助・共助を得ていたといえる。

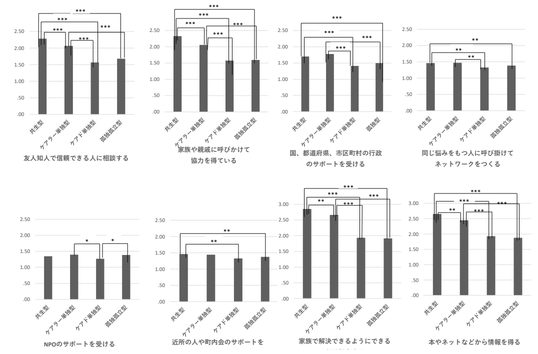


図 2　ケア実践の 8 項目における 4 類型別の平均得点の比較

Tukey の HSD 法による多重比較

*p<.05　**p<.01　***p<.001

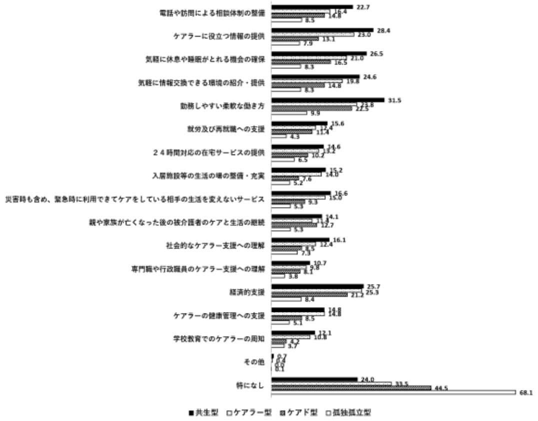
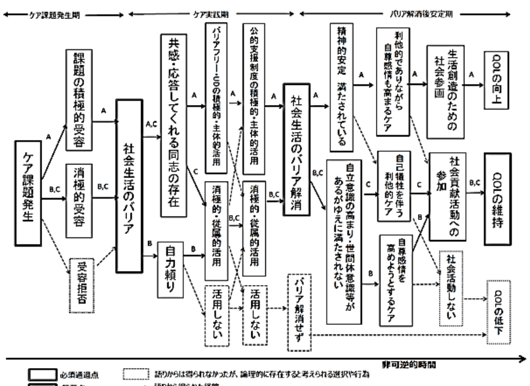


図 3　4 類型別今後の社会に求める支援（複数回答，n=3000)（％)

4 類型別を図 3 に示すとおり，「共生型」が今後の社会に求める支援も多岐にわたり，ケア支援に対し関心や要望が高かった。

(3)ケア課題を抱える当事者へのインタビュー調査結果



本研究ではケア課題に対する意識の変容，起点を探ることを目的として，ケア課題を抱える当事者に対してインタビュー調査を実施した（詳細は佐藤・齋藤 2023)。

ナラティブの分析より，世間体意識や自立意識の高まりによるわだかまりや困難があり，完全に克服されていないケースもあった。また，ケア課題が解決されればそれでケアは終了するわけではないことが確認された。

図 4　3 名の語りの TEM モデル図

TEM(複線径路・等至性)分析(図 4)では，共感・応答しケア課題に一緒に立ち向かおうとしてくれる同志が存在すること，利他的でありかつ自尊感情も高まるようなケアを行うこと，その上で自分らしい生活を創造するために主体的に社会に参画していくことが，ケアを通じた QOL 向上のための過程として必要な要因である可能性が示唆された。

(4)ケアラーの課題に照らした授業プログラムの開発

上記調査を踏まえ，ヤングケアラーへの気づきを促し，自身がケアしケアされていると認識できる授業プログラムを開発し，私立大学附属共学高等学校および私立男子中高一貫進

学校で実践・分析し，課題を検討した(詳細は齋藤 2022b, 2022c)。その結果を援用し，生涯学習プログラムを開発した（Fig.1, 2, 3)。哲学対話型授業プログラムの実践により，ケアを自分事化し，生活創造力・思考力・関係構築力を育成することができた。さらに，ケアラーの認知度を高めることにつながった。

Fig 1 Partnerships for Lifelong Learning Programs

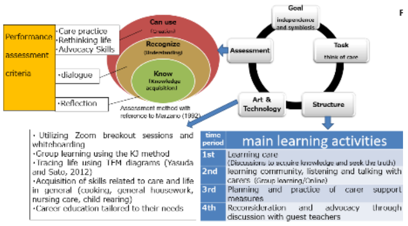


Fig 2 Care-learning Frame
Created by the authors with reference to Ishii (2020)

Fig 3 Care-learning Process Model
A model of the learning process of care was created based on the ALACT model of Korthagen (2001) and Kitada (2009), the ALACT model (action – looking back – awareness of essential aspects – creating alternative methods of action – trial run)

Mieko SAITO, Mayumi SATO, Akane KANOUCHI,2023

(5)ケアラーのケア行動と生活意識の関連性

全国アンケート調査の結果,「体裁(appearance)」「協働(collaboration)」「安定(stability)」「規範(norms)」の 4 因子が抽出され，協働意識が高いほど生きがいを感じ，安定意識が高いほど自己肯定感が高まり、人間関係が豊かになっていた（詳細は Mayumi SATO, Mieko SAITO2024)。

(6)地域に開かれたみんなの居場所：CARE PLACE の開催

CARE PLACE では終活応援ワークショップや映画上映会，茶道体験，専門家講演会などと組わせて地域住民及び学生の憩いの場を提供し，幸福の増進へのエンパワーメントにつながった。

＜主な引用文献および学会発表＞

齋藤美重子・佐藤真弓（2021)「ケア概念およびケアラー研究の現状と課題」(査読有),『川村学園女子大学研究紀要』第 32 巻第 2 号，pp.61-80

齋藤美重子(2022a)「学校教育におけるケア学習プログラムの視点―イギリスにおけるヤングケアラー支援及び日本におけるケア教育研究の動向をふまえて―」(査読有),『川村学園女子大学研究紀要』第 33 巻，pp.189-208

齋藤美重子（2022b)「ヤングケアラーの課題に照らしたケア教育―共生社会に向けて―」(査読無),『地域ケアリング』2022 年 9 月号，Vol.24 No.10，北隆館，pp.44-47

齋藤美重子(2022c)「ヤングケアラーを題材にした学習のデザイン―セルフアドボカシーが活きる共生社会に向けて」家庭科研究 372，pp.14-17, 2022

齋藤美重子・佐藤真弓（2023）ケアラー・ケアド認識 4 類型とケア実践との関連―全国成人アンケート調査の検討から―」（査読有），『川村学園女子大学研究紀要』第 34 巻，pp.175-185

齋藤美重子（2024a）「ユニバーサル・ケアに関する検討－成人アンケート調査とヤングケアラーおよび高校生の語りから―」（査読有），『日本家政学会誌』Vol. 75 No. 1，日本家政学会，pp.24-31

佐藤真弓・齋藤美重子・叶内茜（2023）「ケアに対する生活意識―インタビュー調査による検討から―」（査読有）共著，『川村学園女子大学研究紀要』第 34 巻，pp.211-227

Mayumi SATO, Mieko SAITO, Examining the relationship between carers' attitudes towards life and their care behaviour based on the results of a questionnaire survey in Japan.（査読有）共著，『教育文化研究』第 15 号,教育文化学会誌, 2024, pp.1-17

Mieko SAITO, Mayumi SATO, Akane KANOUCHI, Development of Young Carers' Identities：The Concept of Young Carers in Other Countries and Interviews with Young Carers in Japan, IFHE(International Federation for Home Economics) XXIV World Congress 2022

Mieko SAITO, Mayumi SATO, Akane KANOUCHI, The Lifelong Learning Model for Young-carer and Carer（Family Caregiver），21st ARAHE(Asian Regional Association for Home Economics) BIENNIAL INTERNATIONAL CONGRESS 2023

齋藤美重子編著（2024)『アドボカシーが活きるユニバーサル・ケア―学び直しの家庭科－』大学教育出版

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計13件（うち査読付論文　8件／うち国際共著　0件／うちオープンアクセス　8件）

１．著者名 Mayumi SATO, Mieko SAITO	４．巻 第15号
２．論文標題 Examining the relationship between carers’ attitudes towards life and their care behaviour based on the results of a questionnaire survey in Japan	５．発行年 2024年
３．雑誌名 教育文化研究	６．最初と最後の頁 1-17
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 齋藤美重子	４．巻 Vol.75, No.1
２．論文標題 ユニバーサル・ケアに関する検討―成人アンケート調査とヤングケアラーおよび高校生の語りから―	５．発行年 2024年
３．雑誌名 日本家政学会誌	６．最初と最後の頁 .24-31
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 齋藤美重子，齋藤和可子	４．巻 43
２．論文標題 教員連携授業による金融リテラシー育成に関する検討－ライフプランからエシカル消費をとおして－	５．発行年 2023年
３．雑誌名 消費者教育	６．最初と最後の頁 97-107
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 齋藤美重子	４．巻 2023May
２．論文標題 あなたもわたしもケアラーです！	５．発行年 2023年
３．雑誌名 Metis	６．最初と最後の頁 2-4
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 齋藤美重子	4．巻 Vol. 26 No.1
2．論文標題 ヤングケアラーって何？　―ケアラーのための企画を考えよう―	5．発行年 2024年
3．雑誌名 地域ケアリング	6．最初と最後の頁 30-33
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 ―

1．著者名 齋藤美重子	4．巻 Vol.24 No.14
2．論文標題 ヤングケアラーの課題に照らしたケア教育―共生社会に向けて―	5．発行年 2022年
3．雑誌名 地域ケアリング	6．最初と最後の頁 36-39
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 ―

1．著者名 齋藤美重子・佐藤真弓	4．巻 34
2．論文標題 ケアラー・ケアド認識4類型とケア実践との関連―全国成人アンケート調査の検討から―	5．発行年 2023年
3．雑誌名 川村学園女子大学研究紀要	6．最初と最後の頁 175-185
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 ―

1．著者名 齋藤美重子	4．巻 372
2．論文標題 ヤングケアラーを題材にした学習のデザイン―セルフアドボカシーが活きる共生社会に向けて	5．発行年 2022年
3．雑誌名 家庭科研究	6．最初と最後の頁 14-17
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 ―

１．著者名 佐藤真弓・齋藤美重子・叶内茜	４．巻 34
２．論文標題 ケアに対する生活意識―インタビュー調査による検討から―	５．発行年 2023年
３．雑誌名 川村学園女子大学研究紀要	６．最初と最後の頁 211－227
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 齋藤美重子，佐藤真弓	４．巻 11
２．論文標題 求められる教師像の実態と課題 ―「行政が求める教師像」と「児童生徒の記憶に残る教師像」の検討から―	５．発行年 2022年
３．雑誌名 教育文化研究	６．最初と最後の頁 45-60
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 齋藤美重子	４．巻 33
２．論文標題 学校教育におけるケア学習プログラムの視点 ―イギリスにおけるヤングケアラー支援及び日本におけるケア教育研究の動向をふまえて―	５．発行年 2022年
３．雑誌名 川村学園女子大学研究紀要	６．最初と最後の頁 189-208
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 齋藤美重子	４．巻 1
２．論文標題 「共生」社会に向けた教育に関する一考察―学生からみたダイバーシティ＆インクルージョンをとおして―	５．発行年 2022年
３．雑誌名 女性学・ジェンダー視点から再考する建学の精神とその現代的課題　女性学研究所教育研究奨励報告書	６．最初と最後の頁 123-139
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 齋藤美重子，佐藤真弓	４．巻 32
２．論文標題 ケア概念およびケアラー研究の現状と課題	５．発行年 2021年
３．雑誌名 川村学園女子大学研究紀要	６．最初と最後の頁 61-80
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

〔学会発表〕　計18件（うち招待講演　3件／うち国際学会　2件）

１．発表者名 Mieko SAITO, Mayumi SATO, Akane KANOUCHI
２．発表標題 The Lifelong Learning Model for Young-carer and Carer (Family Caregiver)
３．学会等名 21st ARAHE(Asian Regional Association for Home Economics) BIENNIAL INTERNATIONAL CONGRESS 2023（国際学会）
４．発表年 2023年

１．発表者名 叶内茜・齋藤美重子・佐藤真弓
２．発表標題 学校外の子どもの居場所支援の検討
３．学会等名 日本家政学会第75回大会
４．発表年 2023年

１．発表者名 佐藤真弓・齋藤美重子
２．発表標題 全国成人アンケート調査にみられるケアのイメージ
３．学会等名 日本家政学会第76回大会
４．発表年 2024年

１．発表者名
叶内茜，齋藤美重子，佐藤真弓

２．発表標題
学校外の子どもの居場所支援の検討

３．学会等名
日本家政学会第75回大会

４．発表年
2023年

１．発表者名
杉本一生，齋藤美重子

２．発表標題
総合的な学習の時間を中核とした教科等横断的な消費者教育の検討 ～食品ロスを題材にして～

３．学会等名
日本消費者教育学会　第43回大会

４．発表年
2023年

１．発表者名
齋藤美重子

２．発表標題
あなたもわたしもケアラーです！

３．学会等名
公益財団法人明治安田こころの健康財団（招待講演）

４．発表年
2023年

１．発表者名
齋藤美重子

２．発表標題
ヤングケアラーの現状と支援

３．学会等名
我孫子市ヤングケアラー関係職員研修（招待講演）

４．発表年
2023年

１．発表者名
齋藤美重子・佐藤真弓・叶内茜・齋藤和可子

２．発表標題
ケアの多義性への気づきを促す「共生」に向けた家庭科授業―ヤングケアラーを題材にして―

３．学会等名
日本家庭科教育学会第 65 回大会

４．発表年
2022年

１．発表者名
Ｍｉｅｋｏ　ＳＡＩＴＯ，　Ｍａｙｕｍｉ　ＳＡＴＯ，　Ａｋａｎｅ　KANOUCH

２．発表標題
Development of Young Carers’ Identities-The Concept of Young Carers in Other Countries and Interviews with Young Carers in Japan

３．学会等名
IFHE(International Federation for Home Economics） XXIV World Congress 2022（国際学会）

４．発表年
2022年

１．発表者名
齋藤美重子

２．発表標題
すぐそばにいるヤングケアラー―セルフアドボカシーが活きる社会に向けて―

３．学会等名
開隆堂オンライン学習講座

４．発表年
2022年

１．発表者名
齋藤美重子

２．発表標題
あなたもわたしもケアラーです

３．学会等名
としまコミュニティ大学一般公開講座

４．発表年
2023年

１．発表者名 佐藤真弓・齋藤美重子・叶内茜
２．発表標題 ケアに関する社会的支援の利用とケアラーの生活意識との関連
３．学会等名 日本家政学会　第74回大会
４．発表年 2022年

１．発表者名 叶内茜
２．発表標題 ウィズコロナ時代の家庭科教育ー家庭科における実践・体験の意義を問い直す
３．学会等名 日本家庭科教育学会2022年度例会公開シンポジウム
４．発表年 2022年

１．発表者名 齋藤美重子，佐藤真弓，叶内茜
２．発表標題 ケア概念と若者のケアラーの 実態と課題
３．学会等名 日本家政学会
４．発表年 2021年

１．発表者名 齋藤美重子，佐藤裕紀子，川村めぐみ，阿部睦子，望月 一枝
２．発表標題 SDGs 時代 におけるジェン ダー平等研究の 動向をふまえた 学校教育の課題 と研究の視点
３．学会等名 日本家庭科教育学会
４．発表年 2021年

１．発表者名 齋藤美重子，叶内茜，佐藤真弓，髙橋裕子，築舘香澄，永嶋久美子，今井久美子，大坂佳保里，甲山恵美，佐々木唯，藤原昌樹
２．発表標題 官学連携事業としての「ケアラーズサロン」運営上の課題 ―企画・運営の立場から―
３．学会等名 日本家政学会第72回大会
４．発表年 2020年

１．発表者名 齋藤美重子，叶内茜，佐藤真弓，髙橋裕子，永嶋久美子
２．発表標題 ケアラーズサロン
３．学会等名 日本家政学会家庭生活アドバイザー活動報告会（招待講演）
４．発表年 2020年

１．発表者名 齋藤美重子，佐藤真弓，叶内茜
２．発表標題 ケア概念と若者のケアラーの実態と課題
３．学会等名 日本家政学会第73回大会
４．発表年 2021年

〔図書〕　計5件

１．著者名 齋藤美重子編著	４．発行年 2024年
２．出版社 大学教育出版	５．総ページ数 156
３．書名 アドボカシーが活きるユニバーサル・ケアー学び直しの家庭科―	

1．著者名 大学家庭科教育研究会編	4．発行年 2024年
2．出版社 ドメス出版	5．総ページ数 242
3．書名 ウェルビーイング実現の主体を育む家庭科教育の理論	

1．著者名 学校法人川村学園編	4．発行年 2024年
2．出版社 ゆまに書房	5．総ページ数 620
3．書名 近代日本教育史と川村学園	

1．著者名 鶴田敦子，齋藤美重子他	4．発行年 2022年
2．出版社 開隆堂出版	5．総ページ数 143
3．書名 LOOK UP！資料集+食品成分表	

1．著者名 日本家庭科教育学会編	4．発行年 2024年
2．出版社 学文社	5．総ページ数 292
3．書名 家庭科教育研究が拓く地平	

〔産業財産権〕

〔その他〕

川村学園女子大学附属ユニバーサル・ケア研究所を設立し、初代所長を本研究代表者齋藤美重子が就任した。ユニバーサル・ケア研究所主催・我孫子市後援で「みんなの居場所　Care Place」を定期開催し、地域貢献に努め、川村学園女子大学生活文化学科ホームページに掲載した（2020～現在に至る）。 ex.https://www.kgwu.ac.jp/category/seikatusouzou_seikat/2020/ https://www.kgwu.ac.jp/category/seikatusouzou_seikat/2021/ https://www.kgwu.ac.jp/category/seikatusouzou_seikat/2022/ また、我孫子市ヤングケアラー関係職員研修を全4回行った。「ヤングケアラー支援事前検討課題と授業実践事例」「ヤングケアラーの現状と支援」「ヤングケアラー支援の際に気を付けること」についての講演とシンポジウムであった。さらに、公益財団法人明治安田こころの健康財団主催による東京都豊島区、神奈川県愛川町での講演を行い、地域の関係機関に広くヤングケアラー周知の啓発活動を行った。 このほか、他国の研究者との国際交流の様子は川村学園女子大学HPに掲載した。https://www.kgwu.ac.jp/category/seikatusouzou_seikat/2023/

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考
研究分担者	佐藤　真弓 (SATO Mayumi) (20825286)	川村学園女子大学・生活創造学部・教授 (32514)	
研究分担者	佐瀬　茜（叶内茜） (KANOUCHI Akane) (80849092)	川村学園女子大学・生活創造学部・准教授 (32514)	

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考
研究協力者	村本　ひろみ (MURAMOTO Hiromi)		
研究協力者	齋藤　和可子 (SAITO Wakako)		

７．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕　計2件

国際研究集会	開催年
IFHE(International Federation for Home Economics)　XXIV World Congress 2022	2022年～2022年

国際研究集会	開催年
21st ARAHE(Asian Regional Association for Home Economics) BIENNIAL INTERNATIONAL CONGRESS 2023	2023年～2023年

8．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関